

大学生の自立に関する自己評価に影響する要因

高田 千秋*・神川 康子

Important Factors Influencing Mental, Physical, Economical and Social Independence of University Students

Chiaki TAKATA and Yasuko KAMIKAWA

キーワード: 自立、大学生、自己評価、消費者教育

Key words : Independence, University students, Self-assessment, Consumer education

1. 緒言

自立を考えると、その分類の仕方は研究者によって様々である。久世(1980)は自立を身体的自立・行動的自立・精神的自立・経済的自立の4つに分類し、また、渡辺(1995)は経済的自立・精神的自立・生活的自立の3つに分類している。これらはともに人間の自立を社会的視座から捉えているといえよう。親に経済的、精神的に依存している若者を「パラサイト・シングル」と名づけ、このような若者の増加の問題点を指摘した山田(1999)も、やはり自立を社会的側面から捉えており、一般的にこの側面からのアプローチが多いと思われる。

一方、上子(1982)は自立を行動・決定・価値・情動の4側面から概念化している。「行動的自立」とは人が他人の助けを借りずに自分の力だけで行動することであり、「決定的自立」は自らの判断に従ってものごとを決めること、また「価値的自立」は自分自身の考え方の基盤に従って、物事が望ましいかの判断をすること、そして「情動的自立」は他者からの具体的な支持や愛情がなくても心の平安を保つことができることである。これは個人が自らの情動や価値を持ち、自ら考え、自らの意思決定を行ない、そして自ら行動する目的や手段、プロセスに関わり、人間の内的側面から自立を捉えていると考えられる。

消費者教育における「自立」は後者の視点を持つ。一人ひとりの消費者が自分自身の生活目標を設定し、その生活目標を実現するために、総合的、合理的な意思決定をし、また、生活環境を醸成する主体となるような、自立した消費者を育成することを消費者教育は目指している。

本研究においては、社会的側面に視座を置き、大学生の自立の自己評価に関して、その意識構造の特徴を分析することにより、それに影響する要因を検討する。第一に、一般に定義されている自立、いわば「望ましい自立」と比較しながら大学生の自立に関する自己評価構造の特徴を分析する。第二に、自立に関する自己評価を類型化し、盛んに研究されている脱青年期、いわゆるパラサイト・シングルとの比較および

仕送りやこづかいの有無等の金銭に関する事柄、性格や価値観等との関連を検討する。

このような分析により、大学生の自立に関連する諸要因の実態が明らかになり、主体的に行動できる人格および消費者を育成する上での実践的課題へのアプローチになると考える。

2. 調査方法

調査対象 本研究は、富山大学学生を対象に、質問紙調査によって行なった。調査票は直接配布し、その場で記入してもらい回収した。配布数は357票、有効回収票は344票であり(有効回収率96.4%)、それらすべてを分析の対象とした。

調査時期 平成13年11月

調査項目 自立尺度については、福島(1996)が自立の概念を明らかにするために作成した56項目を参考にして用いた。福島は「自立している」というときに何をもちて自立とみなすのか、その具体的な内容及び重要性の程度について調べ、「一般的に考えられている自立の概念を明らかにする」ことを目的として56項目を作成したのだが、本調査ではそれらを参考にして、どれだけ自立しているかを測る尺度を作成した。

項目の採択にあたっては、対象者が大学生でほとんどが独身であり、仕事を持っていないことから、配偶者に関する項目と仕事に関する項目を削除した。さらに因子負荷量の高いことを基準として、17項目を採択した。

各項目について、図1に示すような「全くあてはまらない(1)」、「あまりあてはまらない(2)」、「わりとあてはまる(3)」、「非常にあてはまる(4)」の4段階で回答を求めた。

性格に関しては、「自分はプライドが高いほうだ」、「友だちが多いほうだ」など性格に関する11項目について、「全くあてはまらない(1)」～「非常にあてはまる(4)」の4段階評定で回答を求めた。また、価値観に関しては「自分の能力を高めること」、「社会のために貢献すること」など価値観に関する31項目について、「全く重要でない(1)」～「非常に重要である(4)」の4段階評定で回答を求めた。

* 奈良女子大学大学院人間文化研究科

3. 結果

1) 自立度の全体的な特徴

自立に関して自分にどの程度あてはまるかをたずねたところ、「非常にあてはまる」という回答の割合が高かったのは「自分の分の洗濯は自分でできる」(60.2%)や「自分の周りの掃除は自分でできる」(50.3%)、「日頃の自分の食事は自分で作ることができる」(37.8%)といった項目だった。

逆に「全くあてはまらない」割合が高いのは「自分で生活できるだけの収入を得ることができる」(32.6%)や「自分ひとりでも生きていける」(27.9%)、「自分の将来、進路に関して明確な目標を持っている」(16.0%)、「親が困った時、親から頼られる」(14.8%)といった項目であった。これらは「全く」と「あまり」を合わせた「あてはまらない」も半数以上と高い割合となっている。「自分の身近なことにとらわれず、社会的に広い視野を持っている」という項目は、「全くあてはまらない」割合は低い、「あまりあてはまらない」とする割合が高いため、「全く」と「あまり」をあわせた割合が半数を超えている(60.4%)。

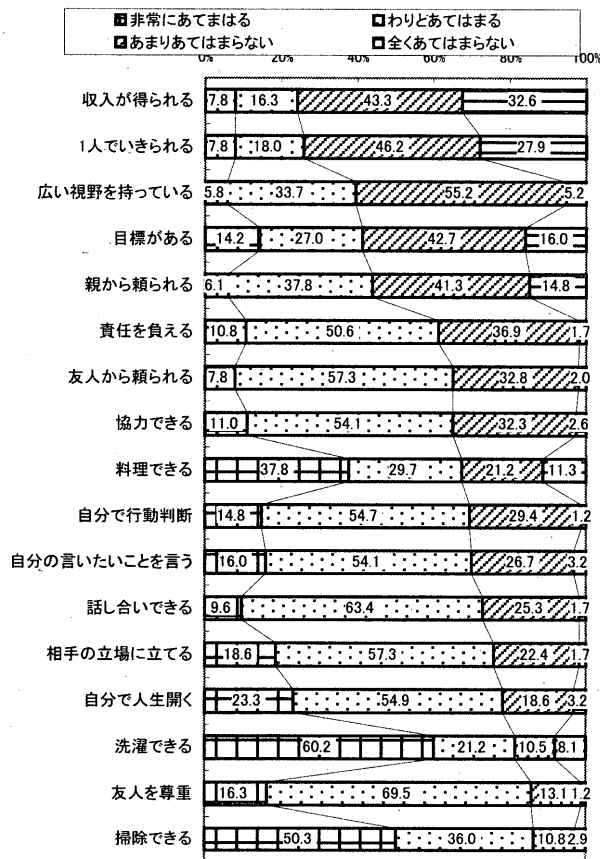


図1 自立に関する自己評価

2) 自立尺度の構造

自立度の構造を明らかにするため、全17項目について、主因子法及びバリマックス回転による因子分析を行なった。その結果、4つの因子が抽出された。因子の命名・得点化の際には、各因子について因子負荷量が.40以上の項目を採択した。それぞれの項目内容を検討し、1. 経済的な自活や判断・責任に関する<独立>因子、2. 相手の立場を尊重したりお

互いに助け合うことに関係する<他者との相互理解>因子、3. 洗濯・炊事などができることに関する<身辺自立>因子、4. 親や友人から信頼されている<親・友人からの信頼>因子と命名した。

表1 自立尺度の因子分析結果

	I	II	III	IV
<独立>				
・自分ひとりでも生きていける	.686	.050	.094	-.148
・自分のことは自分で考えて判断し、行動する	.640	.126	.093	.164
・自分の人生は自分で切り開く	.618	.073	.159	.235
・自分で生活できるだけの収入を得られる	.515	.013	.062	.059
・自分で言ったことに責任を負うことができる	.468	.259	.083	.127
・将来・進路に関して明確な目標を持っている	.414	.047	.060	.128
<他者との相互理解>				
・意見の違う人も協力し合える	.098	.771	.079	-.019
・相手の立場に立って考えることができる	.014	.640	-.031	.192
・友人の考えを尊重する	.104	.613	.124	.217
・自分と意見が違う人ともお互いの立場を理解し合えるよう、話し合いができる	.132	.592	.043	.226
<身辺自立>				
・自分の分の洗濯は自分でできる	.093	-.018	.792	.041
・日頃の自分の食事は自分で作ることができる	.200	.046	.787	.059
・自分の周りの掃除は自分でできる	.104	.143	.557	.132
<親・友人からの信頼>				
・友人が困った時、友人から頼られる	.140	.215	.122	.671
・親が困った時、親から頼られる	.111	.190	.079	.481
固有値	2.246	2.146	1.665	1.173
寄与率	13.209	12.625	9.797	6.899
累積寄与率	13.209	25.832	35.630	42.530

それぞれの因子について、1項目あたりの平均値を算出したところ、<独立>では2.49、<他者との相互理解>では2.87、<身辺自立>では3.20、<親・友人からの信頼>では2.53となった。

3) 自立度によるクラスターの特徴

次に、得られた因子に関して各サンプルごとの因子得点をAnderson-Rubin法により計算した。この4種類の因子得点からみて、類似の特徴を持つ人をグループ化するために、再配置法による非階層クラスター分析を試みた。そして解釈しやすい類型として4種類のクラスターを採用することにし、4因子の平均得点や様々な変数との関連から、総合型自立、他者依存型自立、自己確立型自立、身辺自立型自立と名づけた。それをクラスター間の比較がしやすいように図示したのが図2である。

各クラスターの特徴を記述すると次のようになる。

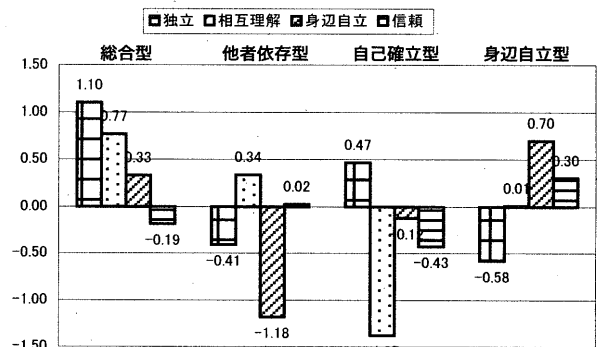
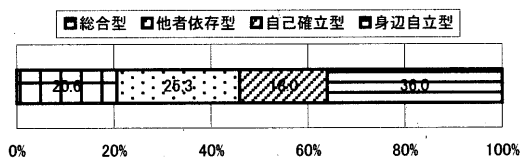


図2 自立の自己評価による4クラスターの特徴

- ① 総合型自立 (71人) : 因子の平均得点からみて、一般的に自立度が高いクラスターである。第1因子の「独立」や第2因子の「他者との相互理解」は4クラスターの中でもっとも高い。第4因子の「親・友人からの信頼」のみが低い。
- ② 他者依存型自立 (87人) : 第3因子の「身辺自立」については4クラスターの中でもっとも低い。第2因子の「他者との相互理解」と第4因子の「親・友人からの信頼」が0を上回っているが、「親・友人からの信頼」は0付近の得点となっている。
- ③ 自己確立型自立 (62人) : 第1因子の「独立」のみが0を上回り、残りの3因子はいずれも0を下回っている。特に第2因子の「他者との相互理解」は4クラスターの中でもっとも低い。4つの因子の平均得点がかもっとも低いクラスターである。
- ④ 身辺自立型自立 (124人) : このクラスターに属する人は124人と、4クラスターの中でもっとも多い。第3因子の「身辺自立」や第4因子の「親・友人からの信頼」はどちらも4クラスター中もっとも高いものの、その値はさほど高くない。また、第1因子の「独立」に関しても4クラスター中もっとも低いが、突出してはいない。
各クラスターに属する割合は、図3に示すように、「身辺自立型」(36.0%)がかもっとも多く、「他者依存型」(25.2%)、「総合型」(20.6%)と続き、「自己確立型」が18.0%ともっとも少ない割合となった。



次に、基本的属性、現在の生活状況、必要費用の捻出方法、性格特性や価値観との関連を調べるにより、各クラスターの特徴をより詳しくみていくこととする。

(1) 基本的属性との関係

学部、性別、年齢において各クラスター間の有意差を求めることにより、クラスターの特徴をみていく。

学部別では、各クラスターの構成割合に有意差はみられなかったが、男女別、年齢別でみた場合は有意差がみられた。女性は「身辺自立型」に属する割合が42.9%と多く、逆に「総合型」(14.1%)や「自己確立型」(13.6%)に属する割合は低い。男性の場合は、女性に比べ「総合型」(28.8%)や「自己確立型」(23.5%)に属する割合が高いことがわかる。また年齢別にみると、一般的に、年齢が上がるにしたがって「総合型」に属する割合が高くなる傾向がみられる。

自立度の総合点をみても、性別と年齢別では有意な差がみられ、女性よりも男性が、また、年齢の高い人ほど、総合的な自立度が高いことが明らかになった。

表2 各クラスターと基本的属性

	総合型		他者依存型		自己確立型		身辺自立型		判定	
	人	%	人	%	人	%	人	%		
全体	71	20.6	87	25.3	62	18.0	124	36.0		
学部	人文	20	18.7	27	25.2	19	17.8	41	38.3	
	経済	26	20.2	33	25.6	17	13.2	53	41.1	
	教育	16	21.6	17	23.0	14	18.9	27	36.5	
	理	4	25.0	6	37.5	4	25.0	2	12.5	
	工	5	27.8	4	22.2	8	44.4	1	5.6	
性別	男性	44	28.8	31	20.3	36	23.5	42	27.5	***
	女性	27	14.1	56	29.3	26	13.6	82	42.9	***
年齢	18才	13	15.9	23	28.0	25	30.5	21	25.6	
	19才	32	21.3	36	24.0	18	12.0	64	42.7	
	20才	9	17.0	10	18.9	7	13.2	27	50.9	*
	21才	10	24.4	15	36.6	7	17.1	9	22.0	*
	22才	4	30.8	3	23.1	4	30.8	2	15.4	
	23才以上	3	60.0			1	20.0	1	20.0	

***p<.001, **p<.01

表3 自立度の総合点

性別		年齢					
男性	女性	18才	19才	20才	21才	22才	23才以上
46.84	43.56	43.56	46.84	47.00	47.80	49.30	50.60

(自立に関する自己評価17項目を4段階で尋ね、最低点17点から最高点68点となる)

(2) 現在の生活状況との関係

各クラスター間で、現在の生活状況や小・中・高時代のこづかいのもらい方、親の金銭面でのしつけ等がどのように異なるかを調べるため、各クラスターを独立変数、現在の生活状況やこれまでのこづかいのもらい方等を従属変数とし、 χ^2 乗検定及び分散分析を行なった。

表4に示すように、仕送りの有無や仕送り額、臨時のこづかいや貯金の有無及び臨時のこづかい額、貯金額によるカテゴリー間の有意差は認められなかった。また、小中高校時代のこづかいのもらい方及びこづかい額や親の金銭面でのしつけ等もまた、カテゴリー間に有意差をもたらさないことが明らかになった。

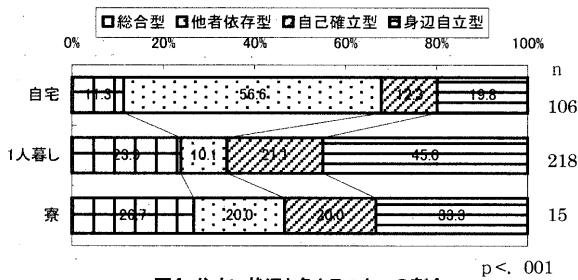
表4 各クラスターと現在の生活状況等

	χ^2 乗値		F値
住まい状況	***	生活費	-
仕送り有無	-	仕送り額	-
こづかい有無	*	アルバイト額	**
アルバイト有無	-	臨時額	-
臨時のこづかい有無	-	貯金額	-
貯金の有無	-	普段持っている金額	-
小学時のこづかい	-	安心する額	-
中学時のこづかい	-	大金だと思ふ額	-
高校時のこづかい	-	人に貸している金額	**
ねだった時の親の対応	-	人に借りている金額	-
金や物の大切さのしつけ	-	人に催促しない金額	-
金利のしくみの教育	-	小学時のこづかい額	-
こづかいの使用のしつけ	-	中学時のこづかい額	-
		高校時のこづかい額	-

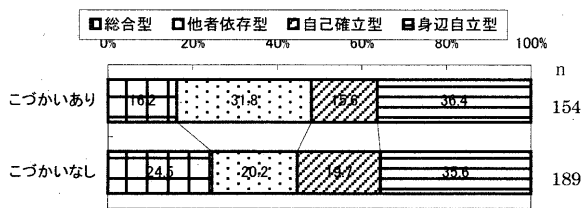
***p<.001, **p<.01, *p<.05

4つの自立度カテゴリー間に有意差がみられたのは、住まい状況、こづかいの有無、アルバイト収入額、人に貸してもよいと思う金額においてであった。

住まい状況についてみると、自宅生は他者依存型に属する割合が56.6%と非常に高く、その他のクラスターに属する割合が低い。また、アパートでの1人暮らし及び寮で生活をしている人は身辺自立型や総合型に属する割合が高いことがわかる。



こづかいについてみると、こづかいをもらっている人は他者依存型に属する人の割合が高く(31.8%)、こづかいをもらっていない人は総合型である割合が高い(24.5%)。身辺自立型に属する人の場合、こづかいの有無による差はほとんどみられない。



アルバイトの収入額(1ヶ月の平均額)は、自己確立型(40,820円)および総合型(39,521円)が高額であり、身辺自立型の金額はもっとも低い(27,597円)。多重比較の結果、身辺自立型と自己確立型および総合型にそれぞれ有意差がみられた。

人に貸してもいいと思う金額はいくら位か尋ねたところ、総合型が14,111円と最も高額となり、総合型とその他のクラスター間すべてに有意差が認められた。

表5 各クラスターとアルバイト収入額及び貸してもよいと思う金額

	総合型	他者依存型	自己確立型	身辺自立型
アルバイト額	39,521	30,920	40,820	27,597
1ヶ月平均額(円)	(32,889)	(24,475)	(32,878)	(30,963)
貸していい額	14,111	8,243	7,654	6,644
(円)	(22,083)	(11,544)	(14,604)	(8,725)

() 内は標準偏差

(3) 必要費用の検出方法との関係

パソコンやゲームソフト、携帯電話の料金、車やバイク、ブランド品、授業料、教科書、本やマンガおよび雑誌、旅行等、大学生が購入または検出していると思われる9品目について、その費用の検出方法が、各クラスター間でどのように

異なるかを調べた。

各クラスター間で有意差が認められた必要費用の検出方法は、「親に出してもらう」、「自分で稼ぐ」、「こづかいや仕送り等をためる」であった。

「親に出してもらう」数をもっとも多いのは、他者依存型であり、親に出してもらう数が少ない総合型および自己確立型との間にそれぞれ有意差がみられた。

「自分で稼ぐ」数をもっとも多いのは総合型で、そのあと自己確立型、他者依存型と続く。「自分で稼ぐ」数をもっとも少ないのは身辺自立型である。総合型と他者依存型および身辺自立型との間に有意差が認められた。

「仕送りやこづかい等をためる」数をもっとも多いのは身辺自立型である。もっとも少ない他者依存型との間に有意差が認められた。

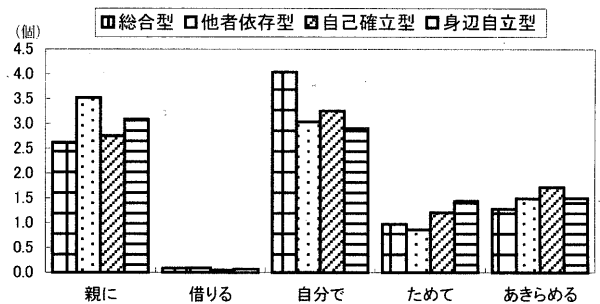


図6 各クラスターと必要品目の検出方法

(4) 性格特性、価値観との関係

性格に関する11項目および価値観に関する31項目に対し主因子法、バリマックス回転による探索的因子分析を行なったところ、性格に関しては「まじめさ」「活発性」「流行チェック」「否自己抑制」の4因子、価値観に関しては「学歴重視」「自己成長重視」「社会貢献重視」「家庭重視」「健康重視」「活動性重視」の6因子が抽出された。

4つのクラスターを独立変数、性格の4つの因子得点および価値観の6つの因子得点をそれぞれ従属変数とする一要因分散分析を行なった。その結果、性格に関しては「まじめさ」「活発性」「否自己抑制」において、価値観に関しては「社会貢献重視」「活動重視」において有意な差が認められた。

性格の「まじめさ」については総合型と自己確立型、身辺自立型と自己確立型との間に有意差がみられた。「流行チェック」では総合型と他の3つのクラスターの間、自己確立型と身辺自立型との間に有意差が認められた。「否自己抑制」は自己確立型と身辺自立型との間に有意差が認められた。

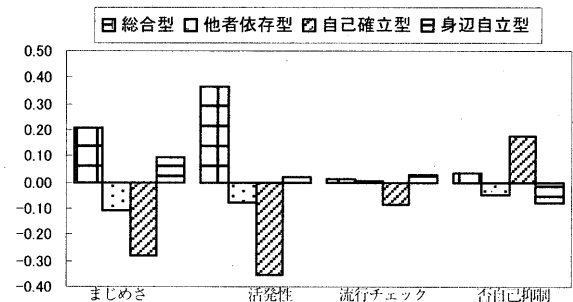


図7 各クラスターと性格特性

また、価値観の「社会貢献重視」では、自己確立型と他の3つの因子の間に有意差が認められた。「活動重視」に関しては総合型と他者依存型および身辺自立型との間にそれぞれ有意差が認められた。

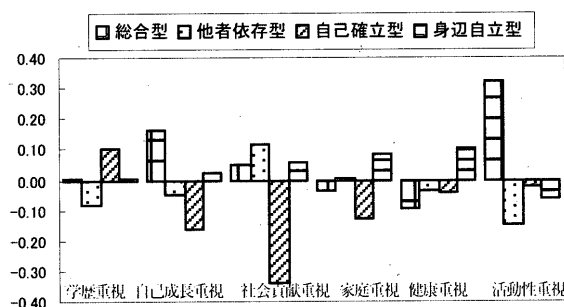


図8 各クラスターと価値観

4. 考察

大学生の自立に関しての全体的な特徴として、洗濯や掃除、料理といった家事は自分でできるとする割合が高いことが挙げられる。特に洗濯と掃除に関しては半数を超える。これは、今回たずねたのが「できるかどうか」であり、実際に「している」かどうかの評価とは異なること、また、家事の中でも洗濯と掃除は、現代ではほとんど全自動の機械で済ますことができるために、洗濯や掃除に関しては自立度が高いという結果になったものと考えられる。

収入を得ることや自分一人で生きること、将来や進路に対する目標を持つことに関しては、全くあてはまらないという回答の割合が高い。

自立は、おもに「経済的自立」・「精神的自立」・「生活的自立」の3つに分類される(渡辺)の一般的なものである。また、最近では他者と適切な相互関係を築き上げそれを維持することも「自立する」上での必要な側面(福島)と捉えられており、平成15年度用高校家庭総合の教科書にも、「精神的自立」「経済的自立」「生活的自立」に加え、家族や友人との関係、地域などでのよい人間関係を築いたり、地域の活動やボランティア活動に参加していく「関係的自立」が掲げられている。これらの自立型は、自立した成人のあるべき姿、望むべき自立像といえるが、大学生段階における自立の自己評価意識の実態について把握するために因子分析を行った。

大学生の自立は、自立に関する17項目の自己評価を因子分析した結果、<独立><他者との相互理解><身辺自立><親・友人からの信頼>という4つの因子構造からなっていた。

第1因子において、自活できるだけの収入を得るという経済的な側面と、判断・責任性や自分なりの考えを持つという精神的な自立の側面がまとまって抽出された。古市(1984)や福島が行なった調査でも経済的自立の項目と両親からの情緒的自立の項目がまとまって一つの因子として抽出されている。これに関して福島は、「経済的に自活していること、それにとまって精神的に安定していることが大きな要素として認識されており、一般的には、自立=経済的自立+精神的自立と捉えられているようだ」と述べている。

相手の立場を尊重したりお互いに助け合うことに関する<他者との相互理解>と、自分が親や友人から信頼されていることに関する<親・友人からの信頼>はともに自分と他者との関係についての側面であり、「関係的自立」と捉えることができるのだが、本研究においては2つの因子に分かれて抽出された。相手の立場を尊重し、助け合うことはいわば自らが主体的・能動的に行なう事柄であり、親や友人から信頼されることは客体的・受動的な事柄であるため、このような結果となったのだろうと考えられる。また、1項目あたりの平均得点をみると、<他者との相互理解>の平均得点は比較的高く、2.870であった。われわれを取り巻く家庭や学校、地域社会の中に、他者と協力して行動しなければならない場面は多々ある。それを通して他者との相互理解能力が身につく、このような高い得点となったのだろう。一方、<親・友人からの信頼>の平均得点は2.531と低い。信頼感は、他者との心理的距離と相互的に関連する(天貝, 1996)ことや生涯においてSelf-Esteemに肯定的な影響を及ぼす(天貝, 1997)ことも明らかになっているが、人間関係の希薄な時代に生きる大学生は、親や友人から頼られるという経験自体がほとんどないのではないかと考えられる。

自立尺度の4つの因子得点によって、大学生を分類したところ総合型、他者依存型、自己確立型、身辺自立型の4つに分類でき、それぞれの特徴を探索した。

総合型は<独立>や<他者との相互理解>がそれぞれもとも高く、全体的に自立度が高い。年齢が高くなるとともにこのクラスターに属する割合が高くなるという傾向がみられる。男女別でみると、女性が属する割合は低い。また、アルバイトの収入額と人に貸してもよいと思う金額とは相関があり(高田, 2002)、このクラスターの傾向と一致する。費用の捻出方法としては、親に出してもらうことが少なく、アルバイトなどをして自分で費用を捻出するようである。また、性格は「まじめさ」と「活発性」の因子が高く、他のクラスターよりも「運動やスポーツをすること」や「体を使って活動すること」といった「活動性」を重視する傾向および「他の人のためになる仕事をすること」や「社会のために貢献すること」など「社会貢献」に価値をおく傾向もみられた。

自己確立型は、<独立>のみが高く、他の<他者との相互理解><身辺自立><親・友人からの信頼>はいずれも低い。特に<他者との相互理解>の低さは顕著である。1ヶ月のアルバイトの収入額がもっとも高いため、親に費用を出してもらうことは少なく、自分で稼いで費用を捻出する傾向もみられるが、他のクラスターと比較して、あきらめるという選択をする割合がもっとも高いことがわかった。山田(2002)は、若者の価値意識、特に享楽主義的価値観に関する研究において、男性未婚者に、努力を厭う意識が強いことを指摘している。本研究においても、このクラスターに属する女性の割合は低く男性の割合が高いため、この知見に添う結果となった。「まじめさ」や「活発性」といった性格特性の因子得点は低く、「自分の感情をコントロールできなくなる時がある」といった「否自己抑制」の得点が高いという特徴がみられる。

「学歴」を重視し、「社会貢献」には極めて価値観をみいださないようである。時代とともに、家族のために犠牲という意識は弱まっており（山田）、ましてや他人のためにという意識は、年齢の低い者が多く属するこの自己確立型にはほとんどみられない。自己確立型は、他者との関わりを拒み、自己中心的なタイプであるといえる。

他者依存型と身辺自立型は、特徴に共通した部分がみられる。

他者依存型は、＜身辺自立＞が顕著に低く、＜独立＞も低いクラスターである。＜他者との相互理解＞のみが高い。このクラスターは、自宅で暮している人が属する割合が非常に高く、アパートなどで1人暮らしをしている人が属する割合は低い。また、こづかいをもらっている人が多く、費用の捻出の際も、親に出してもらおうことが多いようである。

一方、身辺自立型は＜身辺自立＞が高く、＜独立＞が低いクラスターであり、女性の42.9%が属する。アルバイトの収入額や人に貸してもよいと思う金額ももっとも少ない。費用を捻出する際は自分で稼ぐのではなく、親からもらうこづかいや仕送りなどをためて捻出する傾向がみられる。

宮本ら（1997）は、社会人になっても経済的・精神的にも日常生活の上でも自立したとはいえない若者が増加したことから、青年期以後成人期以前の時期を「脱青年期」と名づけた。また山田は、住居の提供など有形、家事の代行など無形の援助をうけ、親に依存する若者を「パラサイト・シングル」と名づけた。大学生は青年期に属しているため、「脱青年期」にはあてはまらず、「パラサイト・シングル」は親と同居している未婚の若者を指すが、本研究において明らかになった大学生の自立型のうち、他者依存型と身辺自立型は、自宅生か一人暮らしによって身辺自立の程度に差があるものの、どちらも経済上・意識上親に依存しており、「脱青年期」および「パラサイト・シングル」の特徴と類似した部分が多くみられる。

4つのクラスター間に有意差がみられたのは、性別、年齢、住まい状況、こづかいの有無、アルバイト収入額、人に貸してもよいと思う金額、必要費用の捻出方法、性格および価値観においてであった。大学生の自立に関する自己評価には、現在の生活状況や本人の価値観等が大きな影響を与えており、小中高校時代のこづかいのもらい方やこづかい額、親の金銭面でのしつけなど幼少時からの生育環境は有意差をもたらさないことが明らかになった。しかしながら、大学生の生活状況や価値観等には親の経済状況やしつけなどが影響を与える要因としている知見は多い。このことから、大学生の自立に関する自己評価には、直接的には現在の生活状況や本人の価値観が影響を与えており、また、間接的に幼少時からの金銭面でのしつけ等の要因も関わりを持つと推測される。

5. 要約

本研究は、大学生の自立の自己評価に関して、その意識構造の特徴を分析し、それに影響する要因を検討した。その結

果、次のことが明らかになった。

- (1) 大学生の自立は、＜独立＞＜他者との相互理解＞＜身辺自立＞＜親・友人からの信頼＞という4因子構造からなっていた。
- (2) 大学生の自立に関する自己評価は、一般に考えられている「望ましい自立」像とは異なっていた。
- (3) 自立に関する自己評価の特徴から、大学生は総合型、他者依存型、自己確立型、身辺自立型の4つのクラスターに分類することができた。
- (4) 大学生の自立型のうち他者依存型と身辺自立型は、「脱青年期」および「パラサイト・シングル」の特徴と類似した部分が多くみられた。
- (5) 大学生の自立に関する自己評価には、現在の生活状況や本人の価値観等が影響している。

引用文献

- 久世敏夫・久世妙子 1980 自立心を育てる 有斐閣
渡辺純子 1995 生活経営論—ゆとりある生活を願って—
ドメス出版
山田昌弘 1999 パラサイト・シングルの時代 ちくま新書
上子武次 1982 親は子どもの自立を育てているか 児童心理, 36, 55-65
今井光映 1992 消費者教育10のQ&A 消費者教育, 12
日本消費者教育学会
福島朋子 1996 成人における自立観—概念構造と性差・年齢差 仙台白百合女子大学紀要, 1, 15-26
家庭総合—ともに生きる—平成15年度用 一橋出版, 平成14年2月28日検定済
古市裕一 1984 成人性基準に関する心理学的研究 岡山大学教育学部研究収録, 65, 17-25
天貝由美子 1996 中・高校生における心理的距離感と信頼感との関係 カウンセリング研究, 29, 130-134
天貝由美子 1997 Self-Esteemを規定する要因としての信頼感—その生涯発達の変化— カウンセリング研究, 30, 103-111
高田千秋 2002 家庭内における金銭感覚の育成と親子関係 富山大学大学院教育学研究科修士論文
山田昌弘 2002 価値意識の世代、家族形態による分析—若者は享乐的になったのか?— JILI FORUM, 11, 22-29
宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘 1997 未婚化社会の親子関係—お金と愛情にみる家族のゆくえ 有斐閣

付記

本研究を進めるにあたり、調査にご協力いただいた学生の皆さんに深く感謝します。なお、本研究のデータ解析はSPSS ver8.01を用いて行なった。